

長野県西部地震

長野県王滝村 総務課長

清 水 一

あの朝は小雨で、夏の賑わいも終り普段の静さに戻っていた山村に、突然発生した直下型地震は、一瞬にして29名の生命を奪い、この村の20数年分の予算額に匹敵する大被害をもたらし、また、様々な問題を残した訳ではありますが、連休を控えた平日で、役場内は、職員は夫々に仕事を始めて間もなく、まったく突然足元から突上げる感じで揺れ出したので思わず立ちあがり「地震だな！！これはデカイぞ」とつぶやいた時、庁内あちこちの壁が落始め書庫上の書類書籍がドタバタと落下、天井から吊した照明器具が落ち出して停電した。「机の下へもぐれ！！」と叫んで自分も入りかけた時に、斜め後方2mに重ね積みした書庫が助役の机上を通過し転落私の机に当たった。一瞬「俺の人生これまでかな」と頭の中をよぎった。そんな中でもドドン、ドン、ドンと庁舎の揺れはおさまらず、あちこちで書庫の倒れる音や物の落下する騒々しいのに暫くは人の声はしなかった。そのうちにかなり長く続いた震動も小康の状態になった時、助役の「外へ出よう」と声がかかったと同時に表へと飛び出したが、屋根瓦が融雪時の雪塊の様子に落下していた。幸いそこを20名余の職員が通過したのに怪我をした者は無かった。役場前では丁度到着した小型トラックの運転

者が「ラジオを入れたら甲府で震度四だと云っていたと声高に話しており、それを聞いた皆は「関東地方か、伊豆沖か、または東海地方か、それにしてもドデカイぞ、ここの震源だって六以上あったな、それにここでこんな感じでは震源地は大被害だろう」と顔面を蒼白にしながら語り合い、早急に村内の被害状況調査をしなければと居合わせた者を、各方面毎に四班編成(一班2~3名)で指名し役場車両と携幣無線機を割り振って「決して無理な行動をしないよう、また、逐時無線機で役場との連絡をとるよう」指示をして、助役、収入役(村長は朝八時前に出張)と共に庁内へ戻り残りの職員と共に、役場から離れた地区に電話での問い合わせ有線放送で被害の報告依頼、地方事務所か木曾警察署へ震源地の問い合わせ等を続けて指示したが「電話が通じません」「有線放送のバッテリーが駄目です」という叫び声が返って来た。「発電機を廻して電源確保を」「無線機には〇〇君情報収集は△△と□□君」とそれぞれ指示している時に元消防団長が「東の森林組合工場の所が崩壊して工場が無くなり民宿もりもとが壊れ美世さんが50mほど落ちて怪我をした、おんたけ生コン工場も押し流されている、県道も橋梁もろとも無くなっているし森林組合や生コン

の人達幾人か行方不明だ」との駆け込み報告に続いて消防団長も飛び入って来て同様の報告があり、消防団員呼集サイレンの要請も途中の電気不通で駄目一、と一時は事の重大さに茫然となったものだが居合わせた議会議長、助役、収入役、教育長、私、住民課長、消防団長、副団長一同と協議して助役を本部長代理として「王滝村地震災害対策本部」を設置して「防災計画書」に基づき役割分担を半紙に描き事務室に掲示した。東地区の大崩壊によって少くも7~8名が行方不明と判明し報告された状況では、余りにも大量の上砂流出であり面積的にも広範囲であり消防団員のみでは搜索が不可能との判断で自衛隊の出動要請の決定がされた訳であったが公社電話(当時)も防災無線電話も思うように繋がらずに立ちが増幅するばかりでさっぱりであった。その頃から報道機関による緊急電話が連続して入り始め「〇〇放送ですが」「△△新聞ですが」「〇△TVですが」「王滝村が震源地と云う情報ですが被害の状況は……。」矢継ぎ早やに問いかけられ頭初は東地区の概況を応答していたもののそれ以上の返答出来ず、早く状況把握をしたい、被災住民への対応は……と気が急ぐばかり、「被害状況調査や連絡をとりたいので早く電話を切って下さい……。生きた回線が少いんです」とお願いしても「もっと詳しい情報を……。この電話を切らないで下さい」と逆にお願いをされる始末で思いながらも状況は掴めず、県等との連絡はとれず、その間にも余震は継続してあり私自身の冷静さが失われてしまった。

以上1時間程度の発災時の状況でしたが、当時の混乱と狼狽振りには後日冷静になって

みますと誠に恥かしい限りです。なお恥の上塗りに申しあげますと、私の知る限りでは県、国の指導にも過去に人命に係わる大きな被災経験がなく、この地震は硬い岩盤の上であり地震が来ても大丈夫という根拠の無い安心感に浸りきっていた住民が大多数であったことは否めません。それと前述の安心感から例え災害が発生しても行線無線施設が有り防災無線電話や孤立防止用無線電話があるのだ、また、有線放送施設も停電すれば蓄電池や小型発電機と複数の電源設備もあり、例え1,2地区に不通ヶ所が発生しても充分補完出来ると確信してしまったこと、ましてや放送内容、表現の方法によって混乱発生があるなどは思いもよらぬことでした。○村内への情報について、このたびの大災害に遭遇した結果住民から多くの苦情や要望が出された中で最も多かった事は情報提供が僅少で不安感を大きくしたことであった。○余震に関するもの、○裏山等に生じた亀裂に関するもの、○王滝川上流の既設ダムに関するもの、○天然ダムに関するもの、○被害の状況と程度、いずれの情報も遅ればせがちであったもののまた数少なかったが、収集は出来た、しかし確認、確信して放送出来るものが極めて少く、徒に不安感の増進や流言飛語に繋ってはどの配慮から専門的な判断を得てからと慎重さが禍いしてかコメントが仲々得られなかったことも要因の一つでした。発災後続々と専門の方々が調査に入られたが過去のデータが少く結論付けられる要素が調査後でなければ整わない等からと初期のうちに部分的であったにせよ混乱発生があった訳ですから慎重になってしまいました。次に報道関

係対策ですが前回の御嶽山噴火の時には被災規模危険度等に雲泥の差があり来村の人員にも大差があって前回は賛辞だったのに今度は相互が対応にも大差が出て初めの頃はトラブルが多かったと記憶している。電話の占拠は勿論、机、椅子はもとより村長室、会計室まで一時的に占拠されて驚くと同時に取材競争も厳しくまた激しく愛社精神というか仕事への傾注度の旺盛さに脅威を感じた程で、行方不明者の家族が初めて空からの査察を終えて対策本部への挨拶の途中

とか、遺体発見の後、遺族へ引き渡され、すがついて泣いている状況の取材場面は比較的に見慣れたはずであったが、目のあたりにして、なみの神経では不可能な世界があることを知らされたものです。また情報キャッチとまとめの素早さに感嘆したものです。長野県西部地震発生後の王滝村災害対策本部の対応の詳細は数多くの調査班がそれぞれの立場から結果報告がされているので、私は発災時の短時間の行動を主に書いてみました。